

自明性の解体のなかで

鹿野 政直

歴史学はいま、はげしく化けかわろうとしている。人びとはそのことを身体一杯に受けとめつつ、それぞれ仕事をしているようにみえる。その渦巻きから降りたにひとしい人間だが、それでも、そうした光景をみ、また空気を感じて、それなりに心ゆさぶられる。

一言でいうと、これまで前提としてきた枠組が、検討の対象になつている。歴史学の歴史自体も、展開を忠実に跡づけるヒストリオグラフィから、その意味を問うメタヒストリーとなった。

このような化けかわりは、歴史学だけで起きている現象ではない。おそらく諸科学が軒なみに、そのたぐいの風に煽られている。そればかりではない。生産と流通と消費、社会と自然、女と男、生と死その他もろもろの関

係性が、再吟味の視線に曝されるようになっていく。

思想史学もその例外ではありえない（この機関誌の編成替えも、一つのあらわれであろう）。いやそれどころか、思想史は、歴史学の他の諸分野に比べて、さまざまの行動にでるまえの想念の湧出ないしその体系化を扱うだけに、観念性・内面性・想像性がつよく、それだけ時代への予感性を、おそらく幾らかは濃厚に帯びている。

わたくしはそれを、思想史の特権性として誇示するのではない。マルクスにたいするフォイエルバッハに比定されるような位置を、歴史学の本隊にたいしてもつものではないか、とのべているのである。マイナーの学問だが、それくらい取り柄はあろうと瘦せ我慢しているのが、思想史だ。自分の好みでいえば、春の盛りよりは早

春に心ひかれるのも、そのことと関係するのではと妄想したりする。

ではいま、化けかわりつつある歴史学のなかで、思想史はどんな予感性を發揮しているか。その点では、どんな歴史学の構築を予感しつつあるかということよりも、いまの歴史学の、(はやりの言葉を借用して恣意的に使わせていただく) 脱構築を體現しているという印象のほうがつよい。

やや言葉の遊びめくが、「日本思想史学」というまとまった観念は、「日本」「思想」「史学」というそれぞれ単位において、ゆらぎを余儀なくされている。

「日本」については、「国民国家」という概念の氾濫とともに、アツというまにその不動性根源性が対象化されはじめた。敗戦直後の日本「神話」の解体につづき、第二の「日本」神話解体との様相をさえ呈している。深層で、くにに繋ぎとめられていた意識が、洗いだされはじめたともいえる。その在りようは、歴史研究における従来の天皇制国家批判とは、トーンを異にする。その国家批判さえ含有していた一國本位的な思考方法を、対象化するような国家への距離のとり方・向かいあい方が、そこには芽ばえている。

くにへの固着性からの離脱が、かえって「日本」を立

ちあげている場合もある。東京大学では、「国史学」「国文学」「国語学」が消え、「日本史学」「日本語日本文学」と変ったそう。わたくしの勤務する早稲田大学では、つとに「日本史学」「日本文学」への名称変更がなされていたが、その「日本文学」の教員の担当してきた「国語」は、今年から「日本の言葉と文学」と変えられた。

こうした場合の「日本」の立ちあげが、「日本」の強化でなく、逆に、無条件に前提としていたく、からの離脱意識と、そのくにを世界のなかの一つの存在として置くこととする開く(閉ざす、でなく)意識に支えられていることは、いうまでもない。

そんなとき、刊行されはじめた『岩波講座日本文学史』は、「日本」とは何かへの気持を、あらためて掻きたててくれた。それは、口承文学や「周辺」文学や翻訳文学をも視野に入れ、日本文学を東アジアのなかで捉え直すこととする意欲をもつ講座ではある。が、その場合、在日韓・朝鮮人の文学は、その「日本文学」に入るのだろうか。内容見本とこれまでの配本からするかぎり、わたくしには必ずしも明らかではないが、(一)もし入れるとすると、それは大日本帝國意識の再現という不遜を犯すことになるのだろうか、(二)入れないとすると、深く日本社会ないしその文学状況に影響力をもつそれを排除すること

になるが、如何、(三)日本国籍をもつ人びとの作品だけを入れるならば、国籍で選別するというコッケイな基準をたてることになる、(四)日本文学とは、日本語ないしその語りで表現された文学を指すというべきなのかどうか、などという、さまざまの問いや連想を誘う。(四)の点は、岩波文庫で知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』が、「赤八〇——」つまり外国文学に分類されている(平田賢一氏に指摘されて気づいた)こともかわる。

お隣りといつていい日本文学史におけるこうした構想上の問題は、かなりの重なりをもつて、「日本」思想史学にも適用できよう。日本を規定の枠とする通念は再検討を迫られ、「思想史—日本の場合」といった視角が、拡まつてゆかざるをえないだろう。

では「思想」についてはどうか。いま奥付をみると「昭和二十六年」と記されていて、四五年まえのことになるが、『国民講座』1—「日本の思想」という本が、清水幾太郎の編集で河出書房からでた(この講座は1だけで中絶したように思う)。そこで清水は、思想を、西洋の思想家の生みだした「科学的合理的客観的」な理念体系とする既成の考え方を批判しつつ、「日本の現実のうちに於いて、而も生活と行動との内部に作用する一つの力」として定義し直そうと、口角泡をとばすので論じた

ている。知識人の範疇に入れられない「国民」は、「思想」とは無縁というのが、当時の通念であった。清水がそれを覆そうと懸命になっているのが、印象的で、それにしてもさらに遡ること三十余年の一九一〇年代に、「国民思想」を主題に据えた津田左右吉の卓拔さをもつたものだった。

だが、「思想」をめぐる昨今の状況は、何をもって思想とするかの枠ぎめの問題では、おそらくない。思想史の外の歴史学の諸分野が、顕著に思想史性を帯びつつあるというのが、わたくしのみるところ特徴である。それらが、制度史—辺倒とか、外交細密史とか、経済事史史とかの古典的固有性を、多かれ少なかれ逸脱し、それだけ分野間の壁が低くなったことも、一因ではある。が、そうした状況の現出の最大の要因は、いわゆる社会史の進出にある。「集団 心性」をキーワードとする社会史は、これまで隠されていた、それだけに深く人びとを規制していた意識の深層を抉りだそうとすることを、方法上の持ち味としており、それは、既成の「思想」史に、却って表層の追求に終始してきたとの烙印さえ押しかねない趨勢を造りだしている。

社会史の視角と方法は、「思想」史に、ボディ・プロウのように、じわじわ効いてくるだろう。それは、(一)地

上にそびえたつ思想体系でなく、地表を割ぎとってその下に浸みとおつている意識を白日のもとに曝し、(二)その意味では、個性的なというよりは、民族や国民を超えて共通する意識に焦点をあて、(三)歴史学のなかでもとりわけ文献本位に傾いていた「思想」史を、絵画や伝説など非文書史料の尖端領域とするほどの変化をもたらし、(四)思想の変容よりは貫通するものへの比重を高めた。

さらに「史学」についてはどうか。過去の説明を歴史学の専売とする時期は、過ぎ去ってしまったとの感が深い。いや、それを歴史学の専売とっては、いささか語弊がある。すでに、過去の説明に当たっての僚友であるとともに批判者として、民俗学や人類学があった。また、それぞれの学問は、「史」「学史」というかたちで、固有の過去認識の装置を備えていた。その意味では、専売とするのはそぐわないが、ここでのべようとするのは、そのことではない。

社会学・心理学や医学、また新興の学問としての女性学など、社会や人間の現況の診断・分析を役割とする学問が、その本来の機能において過去の説明に、不可欠にして強力な「戦力」となるような状況があらわれている。たとえば「家族の病理」という主題は、歴史学(ことに思想史学)において、いまや避けられなくなったといえ

ようが、そのさい前記の諸科学との協業、それらからの摂取は、ほとんど必須である。同時にそれら諸科学は、本来の機能をよりよく遂行するために、現況の背景を探りだそうとし、またある場合にはその学問への反省を込めて、過去の探求に乗りだしつつある。その結果、歴史学の位置は、過去探求の諸科学の一つへと転化してしまつた。

わたくしたちが拠つて立つていた「日本思想史学」の自明性は、こうしていまやそれぞれの分節で、再吟味の溝に洗われている。少なくとも、「日本思想史学」という概念を安定した基盤としえなくなつたということだ。

といつて未来が視えているわけではない。これまでの学問の固定性から離岸はしたが、出航したといえるほど目的地は明瞭ではない。そんなとき安丸良夫の『方法としての思想史』(校倉書房、一九九六年)を読んで、いたく感銘した。感銘した点は、その読みの深さ、その一貫性、その予見性など種々あるが、ここではとくに、その「立場」性ということをいいたい。本のあちこちに著者は「立場」という表現を散りばめている。わたくし流にそれを読んで、一人ひとり決意を秘めての、いや公示しての、出発しかりえなかつた。

もつともその言葉は、ただちに自分の上に落ちてくる。

---

わたくしとしては、社会史の手法とともに歴史上の人物が、受動性・匿名性へじりじり追いつめられていることが、どうしても心の底に引つかかっている。

(早稲田大学教授)